

「蔵」のギャラリー CLASSIC 巽留宏さん

1939（昭和14）年 大阪生まれ

1945（昭和20）年 祖父が帝塚山に居を構える

1952（昭和27）年 中学1年生の時、疎開先の奈良から帝塚山へ

2001（平成13）年 「蔵」のギャラリー CLASSIC オープン

2002（平成14）年 「大阪都市景観建築賞」を受賞

ギャラリーでは「ふれあい」をテーマに、「ともに遊ぶ」を提案。

名物は、毎年1月の「市松人形展」や、毎月21日～月末のコラボ展・「ONE・SPACE・GALLERY」。100年前のヤマハ1号オルガンも演奏可。  
住吉区帝塚山中4-10-14 ☎06-6671-6749 11:00～17:00 不定休



築100年の衣装蔵、「蔵の本来の美しさを活かしたもの」、そんな空間を作ってほしいと、郡さんに設計を依頼したところ、当初は蔵の部分を集合住宅のエントランスにするというプランだったのですが、消防法などの関係で実現せず、ギャラリーとして再生することに。それまで、ギャラリーを開こうなどと考えたことはなかったのですが、もともとアートが好きだったこともあり、地域の人たちがふれあえる場になればと思っていました。工事が始まってから、「こんなところに蔵があったのか」と初めて気づく人もいて、周囲の関心が集まり始めたのもおかしなものです。屋根瓦を葺き替え、漆喰の白壁は昔ながらの製法で1年かけて塗り直し、厚さ40センチの壁を繰り抜いて、新たに明かり取りの丸窓を作りました。オープンは2001（平成13）年1月1日、21世紀のカウンタダウにこだわってスタート。母屋跡に建てたマンションの借景としても違和感なく溶け込む佇まいは、私が思い描いていたとおり。翌年、「大阪都市景観建築賞」をいただきました。うれしいことに、最近は、ご近所に新しく建つ家の中に、蔵に調和した白壁などの外装にされる

お宅も出てきました。この蔵の存在が、ささやかながら周辺の町並みにもいい影響を与えているようです。

一方、蔵ギャラリーの活動では、この10年間、毎月手作りのチラシ約1000部を地域にポスティングしています。催しの案内だけでなく、時には、蔵やまちの情報も盛り込んでおり、捨てずにファイリングしてくださっている人も何人かいます。チラシがきっかけで、帝塚山学院の生徒さんも、授業の一環として蔵見学に。わが家で引継がれてきた100年前のヤマハ第1号機のオルガンも、弾きに来てくれました。こうした情報発信も、地域の人たちの意識に何かしら訴えるものがあるのでは、と勝手に思っています。



「蔵」のギャラリー CLASSIC

#### ギャラリー CLASSIC データ

- ・木造2階建て
- ・建築面積：約 24㎡
- ・延床面積：約 43㎡
- ・壁 厚：約 35cm
- ・乾 蔵：敷地の北西隅に配置
- ・平 面：4間×5間
- ・棟 方 向：東西
- ・出 入 口：東側妻入り、南側平入 計2箇所
- ・備 考：ギャラリーとして利用
- ・付 録：実測資料

#### 笑顔、ふれあい

#### 「チンチン電車」とともに 文化として残ってほしい

ギャラリーでは著名な作家さんから新人さん、アマチュアの方まで、あらゆるジャンルの方々の作品展を催しています。漆喰の白壁には、日本的な古いものだけでなく現代的な作品もよく似合うんですね。建物の「蔵」自体がアートと大人気で、遠くから来てくださるお客様の多さに驚きです。木や漆喰の温もりが好きな方は、一日中座っておられますよ。

オープンして12年目になりますが、人間国宝の人形作家さんや音楽家（オルガン見学）など、サラリーマン時代には接点のなかった方々との多くの「出会い」に感謝！ありがたいことです。蔵を壊さずギャラリーにして本当によかったです。

また、ギャラリーのオープン当初には、周辺の蔵をお持ちの方もたくさん見学にいらっしゃいました。「どないして残しはったんですか」とか「うちも壊したくはないけど、どない利用したらいいんやろ？」と。この蔵を残すにあたって私もいろいろ勉強しましたので、「木の温もりを感じる部屋やオー

ディオ室にしてはるところもありますよ」など、知っていることを教えてあげました。残したいという思いを持っておられる方は多いんですね。

理想を言えば、屋敷ごと残して、蔵が蔵としての機能を果たしながら昔ながらの生活を続けていければそれが一番です。が、なかなか難しい。蔵だけ残しても、生活スタイルが変わった今の時代には、不釣り合いです。「無くなっていくのが自然の成り行きやろなあ」というのが持ち主としての正直な実感です。それでも、やはり残ってほしいと思います。

帝塚山の発展と切っても切り離せない「チンチン電車」・大阪に唯一走る、路面電車も、開通100周年を迎えましたが、そんな「チン電」と一緒に、蔵のある町並みを文化として残して欲しいと思っています。変化が求められる世の中だからこそ、単なる過去への郷愁ではなく、文化を次の世代へ上手につないで、よりよい方向へ変わって欲しいという、未来志向の愛着です。